

平成12年度内水面水産資源調査（八郎湖水産資源調査）結果

工藤泰夫

【目的】

八郎湖における主要水産資源の維持増大のため種苗放流の確認並びに資源動向や生態解明のための基礎資料を得る。

【方法】

八郎湖増殖漁協並びに県委託放流状況の把握と時期ごとの漁場環境、操業状況、主要魚種の生育状況等の調査を行う。

【結果及び考察】

1. 種苗放流

ワカサギ卵については、八郎湖産（3/18～4/11採卵）は、4月13日～18日に西部承水路に1,600万粒、東部承水路に2,900万粒、調整池に2,400万粒の合わせて6,900万粒を放流した。北海道網走湖産（4/19、33,820万粒導入）は、5月1日～5日に西部承水路に3,900万粒、東部承水路に13,100万粒、調整池に16,820万粒放流した。平成12年度放流数は、40,720万粒であった。北海道産発眼率（5/1、確認）は、59.9～65.6%であった。

フナについては、11月27日茨城県産のギンブナ体長7～8cmのものを東部承水路、西部承水路にそれぞれ180kg、調整池に240kgの合わせて600kgを放流した。

2. 漁場環境

今年は7月31日に秋田市において37.9℃と記録的な気温となり、8月には真夏日が28日間続くなど気象台観測史上最多となったことから八郎湖の表面水温は、30℃を超えることがあった。

八郎湖では、7月27日に湖心及び調整池東部で、アオコ（藍藻類のAnabaena主体）が発生し、7月31日には

八郎湖全体で確認された。その後、発生消滅を繰り返したものの、昨年のような大発生までには至らなかった。気温は、9月になっても下がらず、アオコの発生が心配されたが、9月14日の調査では、西部承水路並びに大湯村の排水路で、アオコの発生を確認した。これが北部、南部の排水機場から湖内に流入することから、心配されたが、湖内での発生には至らなかった。

3. 操業状況

八郎湖増殖漁協では、アオコが発生したことにより、ワカサギ建網漁業が8月1日に解禁となったにもかかわらず、魚介類のイメージダウンを招くとして、自主的に19日遅らせて、8月20日からとした。これに伴いシラウオ機船船びき網漁業についても操業期間が9月10日から10月25日までを遅らせて、9月20日から10月31日までと変更して実施した。

4. ワカサギ、シラウオ等の成育状況

ワカサギの8月下旬の平均体長は、4.0cmと昨年並で始まり、その後も順調に生育し、10月下旬には5.1cmとこれも昨年並みで経過した。価格は昨年が300円/kgであったが、今年は300円～400円/kgで推移した。

シラウオの9月下旬の平均体長は、4.9cmと昨年よりも小さめであったが、その後順調に成長し10月下旬には6.3cmと昨年並みとなった。価格は前年を500円上回る3,000円/kgであった。

オオクチバスについては、活魚利用が約4.9トン、漁獲量は、16.7トンであった。

文 献

水谷 寿：平成8年度秋田県水産振興センター事業報告書、294～296（1998）

表 八郎湖ワカサギ、シラウオ測定結果

| 採集日 | | 8月29日 | 9月29日 | 10月25日 | 10月31日 |
|------|----|-------|-------|--------|--------|
| ワカサギ | 平均 | 40.5 | | 48.7 | 51.6 |
| | 範囲 | 31～51 | | 41～59 | 42～60 |
| シラウオ | 平均 | | 49.1 | 60.2 | 63.3 |
| | 範囲 | | 38～55 | 55～72 | 47～71 |